

# あけぼの

笠羽  
流雨

## 場所

東京の古い銭湯「あけぼの湯」の休憩所。

## 人物

里見 新一……二〇代前半。作家を目指して東北から上京してきた大學生。非常に温和でだれに対しても丁寧。  
泉 龍太……芸大油画科志望の浪人生。瞳に思いを寄せている。風呂のペンキ絵を補修するバイトをしている。  
石田 瞳……「あけぼの湯」の番台。将来的には銭湯を継ぎたいと考えている。泉を憎からず思っている。  
浜田 志郎……四〇代半ば。サラリーマンで「あけぼの湯」の常連。泉とは仲がいい。  
石田 政夫……六〇代後半。「あけぼの湯」の経営者で、瞳の父。瞳がまだ幼かったころ、妻響子と死に別れている。  
ピエールルノ・ダラン……三〇代半ば。フランス出身の国際的な数学者。「あけぼの湯」常連。山高帽がトレードマーク。  
川本 美咲……泉の高校時代の部活の後輩。演劇部で使う脚本の取材として銭湯に足を運んでいる。

## 場面

1. いい湯だな
2. もう、大人ですから
3. 美味しい食べもの
4. 郷愁
5. 父娘の棋譜
6. 樹海
7. 我流先生
8. あけぼの

# 1 いい湯だな

春。

舞台は暗転。

中央前方の里見にサス。

里見、A3の原稿用紙を見ながら朗読。

里見 愛してくれるなら

どこまでも愛して欲しい

必要としてくれるなら

どこまでも必要として欲しい

見ていてくれるなら

どこまでも見ていて欲しい

どこまでも

どこまでも

不格好な僕の声を

最後まで聞いて欲しい

いつか、どこかで会うはずの

狂おしいほど愛しい

誰かさんに

浜田 うるせーよ。

明転。

泉・浜田、リラックスして座っている。

背景には、はげかかった巨大な富士山の絵が見える。

この絵は劇の進行とともに変化する。舞台上で描くことが最も望ましいが、日め

くりカレンダーのようにもなっている。今後、「絵をめくる」という表現は、

絵の進捗を意味している。また、この絵の背後には、客席を向いた、強力な照明

が配置されており、最後のシーンでは絵をが光を透かして煌々と輝く。

里見 あ、すみません。

泉 いいじゃないか。それ何？……詩？ 有名なあれ、村上春樹とか？

浜田 それは詩じゃなくて小説だろ。

里見 僕が書いたんです。

泉 え、マジで？ すげーな。

浜田 若いのは自由でいいな。元氣いっぱいだ。

泉 うるせーよ。あれ、あんまり見ない顔だね。

里見 あー最近越してきました。

泉 へえ、そうなんだ。

里見 里見新一つて言います。よろしくお願いします。

泉 おう！ 俺は泉だ。泉龍太。つで何？ 作家でも目指してるわけ？

里見 ええ、はずかしながら。

泉 へえ。あれ、それ全部君の作品？

里見 ええ、まあ。今月雑誌に投稿しようと思っているヤツが……。

泉 ちよつと見せてよ。

里見 いいですよ。まあ、まだまだ下手ですけど。(重そうな紙の束を渡しな

がら)

泉 え、詩ってこんなにあるの？

里見 あー、目指しているのはあくまで小説の方なんです。よかつたら、しばらくお貸ししますよ。お家でゆっくり読んで下さい。  
泉 ありがと……。読めるかなあ。

ピエール、いきなり登場。手には牛乳をもっている

ピエール ボンソワール

里見 こ、こんばんは。

浜田 おう、ピエール。

里見 ピエール？

泉 ああ、彼はフランス人数学者ピエールだ。

ピエール そう僕ピエールです。よろしくねえ。(手に持っていた牛乳を飲んで)トレピアン。

里見 ホントにフランスの方ですか？ 経歴詐称とかじゃないですよ？

ピエール 失礼な。

泉 結構有名な数学者だよ。ほら、この前、Eテレに出たし。

里見 え、ホントに?! ピエールさんは、その、銭湯がお好きなんですか？

ピエール ええ。銭湯に入っているといるいろいろなことを思いつきますからね。

里見 あーアルキメデスのな？

ピエール エウリカ!

泉 どういう意味？

里見 「発見した」じゃないっすかね。

ピエール そう、その通り! 古代ギリシャの数学者アルキメデスは王様から出された難問をお風呂の中で解き、うれしさのあまり「エウリカ」と叫んで、そのまま街中を走りまわったんだね。

里見 そのままって……全裸で？

ピエール そう。

泉 え、それでこの前、裸で走りまわってたの？

ピエール まあね。だってさ、懂れるじゃない。アルキメデスとかさ。一生で一度でいいから、あんな発見の瞬間を体験してみたいなっとか、思うわけですよ。

泉 まあ、常連さんには変な人が多いけど、みんないい人だからさ、これからも是非来てよ。

ピエール 変な人とは何ですか!

泉 じゃあ、俺そろそろ帰るわ……。あ、一つ大事なこと言い忘れてた……。

里見 へ？

泉 瞳さんは渡さねえからな!

泉、走ってはけてゆく。

里見 は？

音楽。

泉、背景の絵を迷いながらも一枚めくる。

半分だけきれいになっている。

それをみて悪くないと言った表情。

## 2 もう、大人ですから

机の上にはみかんと、フルーツジュース、コーヒー牛乳が置いてある。  
浜田、新聞を読んでいる。  
泉、厚い紙の束を持って、泣きながら入ってくる。

泉 あーもう、感動しちゃったよ、ちくしょう。(浜田の肩を叩きながら)

浜田 何だよお前。

泉 何だよ浜田さんか……。

浜田 何だよとは何だよ。

泉 ちえエ、浜田さんか……。 (イヤミに)

里見、ゆったり登場。

首には手ぬぐい、手には牛乳を持っている。

里見 こんにちはー。

泉 お、里見。これすごいな！お前さ、きっと小説家になれるよ！

里見 どうしたんですか？あ、ところで、風呂の富士山の絵が半分だけ綺麗だったけど。

瞳、フルーツ牛乳を持って登場。

瞳 ああ、だいぶはげて来ちゃったんでね、泉君に上から描いてもらってるんだよ。

里見 それはすごいなあ。

浜田 こいつ画家志望なの。

里見 へえー。

瞳 ホント、なかなか上手いもんよねえ。

泉 え？ ホントですか瞳さん！

里見 瞳さん？

瞳 え、ああ瞳です。ここの番台やっています。

里見 番台って何ですか？

瞳 ー、番台ってのはちよつと古い言い方なんですけど、要は銭湯の受付だねでも、昔は仕切りの上に座ってたの。だから、そうだな……テニスの審判みたいな感じ。

里見 なるほど。あ、瞳さんってもしかして昨日言った……。 (小声で泉に)

泉 お口チャック。

瞳 あ、そういえば君、新しいお客さんだよね。

里見 あ、里見新一です。

瞳 へえ……里見君！ 君は牛乳派か！

浜田 しぶいねえ。

泉 ここは、普通フルーツ牛乳でしょ。

瞳 そうねえ。

浜田 まあ、俺から見ると、コーヒー牛乳以外を飲んでるヤツはお子様だけだね。

泉 は？

瞳 まあまあ。

里見・泉・瞳・浜田、それぞれ一気飲み。

浜田 くうう、しみる。  
瞳 しみるわあ。  
泉 やっぱ、この味と、この場所は昔から変わらなくていいなあ。  
浜田 お前若いくせに、何言ってるの？ 昔と比べたら、結構変わったらろ。  
泉 え？  
浜田 俺は学生の頃からここに来てるけどなあ、この休憩所が増設されたのは二十年くらい前じゃないかなあ。で、それまでは男女の交流は不可能だったんだよ。非情にも入り口で男女別々になってしまっただなあ、「あなた、またあとでね」「うむ、またあとでな」むぎゅ〜みたいなドラマがあっただなあ。

政夫、いきなり登場。

政夫 あったねえ。  
瞳 お父さん。

政夫 一步脱衣所に入れば、男女の間には高いついたてがあっただなあ、浴場までそのついたては続いてるんだよ。

浜田 そう、でも、声だけは届くもんだからさ……。

政夫 あんた、もう服脱いだ？(二人芝居をする)

浜田 おう、これから入るぞ。

政夫 あ、熱いわ。

浜田 大丈夫か、みつ子……。

政夫 志郎さん！

浜田 みつ子おおお！(絶叫)

瞳 え、なんですか、それ？

里見 ほら、浜田さんの若かりし頃の思い出じゃない？

泉 きつしょー。

浜田 昔はよかったですねえ……。 (ニヤニヤしながら)

政夫 うんうん。

瞳 浜田さんにもそんな時代があったんですか……。

里見 で、そのみつ子さん？ とはどうなったんですか？(メモの用意をしながら)

浜田 ……ああ、昔は情緒があったなあ、ね？(里見を無視して瞳に)

瞳 そうですか？ 私は今の、みんなで喋れるあけぼの湯が好きですけど。

浜田 あ、そう？

政夫 俺も今の方が好きかなあ。

浜田 あ、そうですかあ。

瞳 あ、そうだ泉君、誕生日おめでとう！(泉にプレゼントを渡しながら)

泉 え？ わお、ありがとうございます。

政夫 あ、お前！(瞳に)

瞳 じゃ、私そろそろお仕事戻るね。

泉 はい！

政夫 あ、ちょっと待ちなさい。父さんはちょっと話したいことがあるぞ！

瞳、駆け足にはけてゆく。  
泉、ボーツと余韻に浸っている。

政夫 あ、おい瞳！ ったくあの野郎。

浜田 まあ、そういうお年頃ですよ。

政夫 あいつだつてもう26だぞ。あーもう色々と不安だあ。

浜田 色々経験するのはいいことですよ。

政夫 ……あーあ、お前らは絵だの小説だの、まあ、気楽でいいやな。

政夫、はける。

泉 政夫おじさん怖ええ。

里見 そうだね……。

浜田 あ、なあ、今日はみんなで飲まないか？ 泉を祝ってさ。

里見 あーでも、そろそろバイトなんで。

泉 え、夜勤？！

浜田 そうか、ごめんな……。頑張れよ。

里見、軽い足取りで帰ってゆく。

### 3 美味しい食べ物

浜田 里見はすっかりしてるな。

泉 うん。(牛乳瓶を片付けながら)

浜田 あのさ、お前ももう二十歳だろ。

泉 ……。

浜田 進路の事とか本当にちゃんと考えてるのか？

泉、咳をする

浜田 もう、二浪なんだから。志望校変えるとかないの？ 芸大の油絵……だっ

けか、倍率も相当高いんだろ？

泉 ……。

浜田 ……まあいいよ。今日はめでたい日だしな。飲もう飲もう。(バックから「悪魔ころし」の一升瓶を取り出す)

瞳、いきなり登場。

瞳 こんにちはー。

浜田 うわ、タイミングいいな。

瞳 うふふ、お酒には目がないもんでね。おお、悪魔ころしじゃん。ちょっと

頂いてもいいかしら？

浜田 まあ……。

瞳 ふふふ。じゃあ、コップとおつまみとってくるね。

瞳、楽しそうにスキップではけてゆく。

泉 来年ダメだったら就職するよ。

浜田 そうか……。

泉 俺だって、俺だって生半可な気持ちじゃないんだ。

浜田 うん……頑張れよ。(泉の肩を叩きながら)

泉 うん。

浜田 とにかく、悔いの残らないようにな。

泉 うん。ありがとうございます。

瞳、スキップしながらコップとおつまみを持ってくる。  
ピエールの帽子をかぶってくる。

瞳 へい、へい、へい、へい、へーい。(コップとおつまみを勢いよく机に置いて)

浜田 お、ありがとうございます。何これ？

瞳 コノワタです！

浜田 あ、コノワタ。

泉 何ですか、コノワタって。

浜田 うーん、俺も食べたことは無いからよくは知らないんだけど、何でも日本三大珍味の一つだったような。

瞳 そう！ なまこのはらわたの塩からよ。

泉 な、なまこ……ってあのナメクジみたいな……。俺、ナメクジ超苦手なんですよ。

瞳 えー、どうして？

泉 ヌルヌルしてて身体の範囲がよく分かんないし。うわああ、マジ無理だわああ。

瞳 大丈夫、大丈夫。食べてみると案外美味しいよ。あ、そういえばさ、脱衣所にこの帽子が落ちてたんだけど、誰のかわからない？(帽子をとって机に置きながら)

泉 あ、それ、ピエールのつすよ。

瞳 あ、そつか。じゃあ今度来たときに渡せばいいかな。

浜田 そうだな。じゃあ、飲もうか。

瞳 そうですねえ。では。

瞳、浜田のコップに注ぐ。

浜田 おーおととと。ありがとうございます。

瞳、泉のコップに注ぐ

泉 ありがとうございます。

瞳が自分で注ごうとするのを浜田が優しく制して注ぐ。

瞳 ありがとうございます。じゃ、とりあえず、乾杯、しちゃいましょう！

浜田 おう！ では、泉、二十歳の誕生日を祝いまして、乾杯。

全員 乾杯！ はあ……。

瞳 イヤー至福。泉君どう？

泉 ーんなんかこう、内側からボーツときますね。

瞳 コノワタも是非召し上がれ。

泉 あ、いや、それは、大丈夫です。

瞳 しょうがないなあ……じゃあ、あーん。

泉 あーん。お、おええ……。〔あーん〕につられ食べてしまって

瞳 美味しくなかった？

泉 いや、うまいっすよお。

瞳 良かった。

泉 ちよっとトイレ行ってきます。



泉、上を向いて吐くのを我慢しながら走ってはけてゆく。

浜田 初めて食べたけど、これ旨いな。

泉が嘔吐する音が聞こえてくる。

瞳 でしょ！ まあ、泉君にはちよつと早かったみたいだけど……。

浜田 ははは。……しかし、あいつももう二十歳か……。

瞳 うん。

浜田 何か、不思議だよな。ちよつと前まで子どもだったヤツが今日からいきなり大人ですって。大人になるってのはそんなに単純じゃないだろ。

瞳 うーん、そうかなあ……。

浜田 まあ、四十になってもダメなクソ中年もいるけどね……。俺さ、泉にはちゃんとした大人になって欲しいんだ。しっかり自分の足で地面に立って真っ直ぐ前を向いて歩けるヤツになって欲しいんだよ。

瞳 泉君なら大丈夫。あの子意外としっかりしているとところもあるし。

泉、千鳥足で戻ってくる。

泉 ウイーっす。

浜田 あ、もしかしてお前もう酔った？

泉 そんなことないっすよ。(コップに残っていた酒を全部のみ、手酌する)

瞳 大丈夫？(浜田に酒を注ぎながら)

泉 うふふふ。あははは。(浜田の酒を全部飲んで急に笑い出す)

浜田 大丈夫か、こいつ？

泉 大丈夫デース。(浜田に抱きつく)

浜田 やめる！

瞳 あははは。

浜田 いや、マジで。

泉 そんなこと言わないで下さいよ、瞳さあくん。(浜田を瞳と間違えて、浜田をベタベタ触りながら)

浜田 うわああああ！！(大げさに払いのける)

泉 (大げさに突き飛ばされてシンデレラのポーズになって)あーあ、俺何で落ちたんだろう。正直さ、絶対受かると思ったんだ。あー。ああ……。

瞳 え、泣いてるの？

泉 泣いてないよ！ だいたいさ、予備校のじじいが意味わかんねえだよ。あいつ、俺の絵になんて言ってきたと思う？

瞳 さあ？

泉 「君の絵はエジプトの壁画みたいなお」だっさ。んだよ、畜生！(帽子を床にたたきつける)

浜田 あーあ。

瞳 エジプトの壁画ねえ……。でも、それが泉君の持ち味なのよ。なんか、輪郭がはっきりしてると言うか。

浜田 へえ。

泉 (むっくり起き上がって)もうみんな、もっとバンバン飲みましようよ。あ、俺注ぐんで。

音楽。

酒を飲んで酔ってゆくマイム。

その中で、次第に浜田と泉が喧嘩になってゆく。

泉 だからねえ、そんなもんじゃないんだよ。芸術は。分かってねえなあ。  
浜田 分かってねえのは、お前だ。いいか、社会に出たら大事なのは実績なんだぜ。

泉 人は、人は、実績じゃなくて魂なの……。

泉、大きなあくびと共にその場で寝る。  
帽子を枕にしている。

浜田 つたく、魂まで腐ってやがる。

瞳 ふふふ、泉君寝ちゃった。襲っちゃおうかなあ。

浜田 何だって?!

瞳 冗談よ。(泉の顔を曲げたり伸ばしたりして遊んでいる)

浜田 はあ……こいつはサラリーマンの苦労を知らないんだな。

瞳 は?

浜田 何でもかんでも出しやばりやがって。で、結局後処理するには俺なんだけ。能力無いヤツは黙ってろっつーの。責任持てないくせに調子のってんじやねえよ。クソ豚野郎があ。(頭を抱え顔を隠しながら)

瞳 豚野郎?

浜田 上司だよ。上司、クソ上司だよ。

瞳 そっかー。でもまあ、こっちもこっちでクソおやじがいるからなあ。

浜田 え? おやじって政夫さん?

瞳 あいつこの銭湯を継ぐなって言ってくるんだよ。おかしくない? 普通娘が店を継ぐって言ったら喜ぶよね。

浜田 まあ、そうねえ。何でお前は銭湯継ぎたいの。

瞳 あたしは……あたしは別に何の才能もないけど、小さい頃からここで育って、いろいろな人に会ってきてね。笑ってたり、泣いていたり、怒って喧嘩していたり、悩んだりホントにいろいろな人がいたんだ。でも、このお風呂に入った人は出るときにはイヤなこと全部洗い流しちゃうから、みんなニコニコしてて。ここを守るのが、あたしにできる一番大切な仕事だって、そう思ったんだよね……。

浜田 そうか……。お前は大人だな。

瞳 え?

浜田 でも、おやじさんの気持ちも……分かるよ。この銭湯が続くのは嬉しいんだけどさ、なんつーかな、親ってそういうもんなんだよ。だって、お前結構いい大学も出てるんだしさ……。心配になるんだよ。

瞳 浜田さんに親の気持ちなんて分かるの?

浜田 そりゃあ、まあ、親ですから。

瞳 え、独身じゃなかったの?!

浜田 はは、まあね。

瞳 いつも遅くまでここにいるけど?

浜田 家にいると、奥さんと子ども達に邪険にされるからさ……。

瞳 邪険にされるって……。

浜田 ああ、俺が悪いんだよ。偉そうなことばっか言って、結局大人に成りきれてないんだ。仕事が忙しい分家にいるときは好きなことばかりに夢中になっちゃってさ……。気が付いたらあいつらと目を合わせて喋れなくなっちゃって。

瞳 好きなこと?

浜田 ギターやっててね。まあ、みつ子に折られちゃったけど。バキツと。

瞳 ふーん。

浜田 娘もさ、だいぶ前から俺のこと「お父さん」って呼んでくれないんだよ。なんでだろうなあ……。

瞳 ……。  
浜田 ん？ え、瞳、瞳ちゃん？ 寝てるの？ マジかよ……。

ピエール、目をキョロキョロさせながら登場。

ピエール お……。

浜田 うわあああ。

ピエール うわあああ。

気まずい間。

ピエール お、おはようございます。

浜田 こ、こんばんは。

ピエール ピエールです。

浜田 あ、あ、ピエールか。びっくりした……。帽子無いから分かんなかったよ。つてかなんているの？ もう二時だけど。

ピエール 実は、その、帽子をなくしちゃって……。あれがないと僕寝られな  
いんですよ。知りませんか？

浜田 あー、帽子、帽子ねえ。帽子かあ……。 (泉の枕と化した帽子を見なが  
ら)

ピエール いつも被ってる黒いヤツです。

浜田、枕となっていた帽子を無理矢理引っこ抜く。

帽子は見事にぺしゃんこである。

泉 ああ、行かないで！ (寝言)

浜田 帽子つてこれかな。

ピエール え、いや僕の帽子はもっと高くて……。

浜田 ごめん……。 (つぶれた帽子を手で広げて見せながら)

ピエール オウ……これです。ありがとうございます……。

浜田 泉がやったんだ。

ピエール ああ、いいですよ別に。

浜田 え？

ピエール、帽子を枕にしてその場で寝る。

浜田 帽子がないと眠れないって……。え、そういうこと？

音楽。

泉、二日酔いで調子が悪いのか気持ち悪そうに絵を一枚めくる。  
いかにも失敗したという感じの絵が出てくる。

## 4 郷愁

里見、ノートに何か書き付けている。  
ピエール、分厚い数学の本を読んでいる。  
泉、里見の陰に隠れて横たわっている。  
浜田、いかにも疲れた感じが入ってくる。

ピエール ボンソワール。

浜田 お、ボ、ボンソワール……。あ、そうそう。昨日は大変だったんだぞ。

みんなして寝ちやうから。

ピエール エクスキュゼモワ(Excusezmoi)

浜田 は？ ったく。若いヤツは……。

ピエール ア、ボン？(Ah bon ?)

浜田 あのさ、お前から聞いてないよね。

里見 なるほど。

浜田 おい！

ピエール なんですか？

浜田 はあ……。あ、そういえば泉は？

里見 さあ。二日酔いがひどかったみたいだし、帰ったんじゃないっすか？

浜田 あ……。どおりで風呂の絵が歪んでたのね。

泉 ここにいるわ。(身体を重そうに起こしながら)

浜田 おお……。いるじゃん。

川本、手ぬぐいを首に掛けて入ってくる。  
手にはコーヒー牛乳を持っている。

ピエール ボンソワール！

川本 ボ、ボンソワール。

泉 あ、川本ちゃん！

川本 ん、泉先輩……。お久しぶりです。

里見 後輩？

泉 ああ、高校の部活のね。

川本 こんなところで会うなんて……。いつも来るんですか。

泉 まあ……。

川本 銭湯通いとか……。なんか優雅ですね。

泉 そう？ にしてもお互い歳をとったねえ。

川本 何言ってるんですか。あ、先輩、大学どうですか。

浜田 川本ちゃんだっけ？ そいつ浪人生だよ。

川本 ええ！……すいません。

泉 いいよ、別に。

瞳、ギターで弾き語りをしながら入ってくる。

泉 瞳さん。

瞳 よう！

川本 うわ、格好いい！

瞳 初めまして、番台の瞳です。君の瞳に乾杯！

川本 え？ あ、はい！

里見 瞳さん今日テンション高いっすね。

瞳 そう？

浜田 お前もギター出来たんだ……。

瞳 まあね。

浜田 なんかすげー懐かしいわ。

瞳 まあ、七十年代の曲ですから。あ、そうそう、じゃあ、浜田さんも弾いてよ。はい。(ギターを渡す)

浜田 ギターはもうやめたんだよ。

里見 浜田さんもギターやってたんですか？！

浜田 う……ああ。

瞳 そう、それでね。

浜田 おー、おっとと。昨日のことは内密で。

瞳 じゃあギター弾いてよ。

浜田 分かったよ。弾きやーいいんだろ。弾きやー……。分かりましたよ……。

浜田、ギターで弾き語り。

周りの人は静かに合の手を入れる。

最初はノリノリだが歌っている内に悲しくなって泣きそうになり演奏もぼろぼろになっていく。

歌っている間に政夫が入ってくる。

ピエール オウ……。

川本 え、ええ、どうしたんですか？！

浜田 大人には、大人の事情ってのがあるんだよ。

泉 まあ、分かりますよ。風呂に浸かった後ってちよつとセンチメンタルな気分になりますよね。

ピエール あーうんうん。

浜田 お前らに分かってたまるか……。 (ぼそっと)

政夫 あはは。君もまだ若いなあ。

浜田 いやいやそんな……。

泉 ……ああ、そうそう部活はどうよ、順調？

川本 やってますよ。二年の先輩達はもう引退しちゃったけど。

泉 そっか。あれ、じゃ、脚本は誰が書いているの？

川本 書こうと思ってるんですけど、どうもネタがなくて……。

瞳 なるほど。錢湯を題材に書こうって魂胆ですか。

ピエール いいところに目を付けましたねえ。

政夫 取材ですかあ。ほう？

川本 まあ、そうなんですけどねえ。でも……、やっぱり私には無理なのかなあ。

政夫 えっ、無理、ほう？

里見 そんなのやってみなくちゃ分からないと思いますけど……。

川本 泉先輩と私は本質的に違うんですよ。私はいくら書いてもただ辛いだけで全然楽しくないし……。

政夫 えっ、楽しくない、ほう？

泉 え？ ホントにちよつとも楽しくないの？

川本 ……。 (小さくうなづく)

泉 じゃあ、書くのは難しいかな。

川本 え？

泉 既成のやつやれば？ 面白いのいくつか知ってるけど。

川本 うーん。でも、有名なやつはやりたくないし……。

里見 あ、あの、僕が書きましようか？ なんか見たことしかないんですけど、面白そうだし。ちよつと、前の小説が書き終わって暇なんですよ。

川本 え？

浜田 あ、こいつ、里見って言うんだけど、小説家志望なんだよ。

川本 え、ホントですか？ いるんですね、そういう人。

里見 そんな天然記念物みたいな言い方しないでよ。

川本 じゃあ、お願いします！  
泉 え、いいの？

川本 はい、全面的に……委任します！（やたら楽しそうに）

里見 なんか、やる気になってきた。どういった感じのお話がいいですか？

川本 うーん、じゃあそうだなあー、純愛で！

里見 純愛かー。おっけー。ふふふ。

里見、はけてゆく。

川本 じゃ、私も。そろそろ。

ピエール 僕ももう帰ろうかなあ。

泉 あーみんな帰っちゃうのか。

浜田 じゃあ、俺も帰ろつかな。

泉 うーん、じゃあ、また明日ー！

瞳 うん、じゃあね。

川本・泉・浜田・ピエール、連れだつてはけてゆく。

## 5 父娘の棋譜

政夫、将棋盤を持って入ってくる。

政夫 なあ、瞳、将棋しないか？

瞳 え、なんで。

政夫 いいじゃないか、たまにはさ。

瞳 まあ……いいけどさ。

政夫、将棋盤を置く。

政夫、あぐら。

瞳、正座。

政夫 懐かしいなあ……。俺がどんなに教えても弱くつてき。あ、先手いいよ。

瞳 うん。

政夫 まあ……。

瞳 ん？

政夫 何でこの銭湯があげぼの湯っていうか知ってるか？

瞳 さあ……。どうして？

政夫 何でだろうな。あの馬鹿なおやじの言うことはいつも分かんないことば

っかだったよ。

瞳 はいはいそうですか。

政夫 えーと、こうかなあ。（駒を動かしながら）

瞳 お父さん……。

政夫 ん？ 何だよあらたまつて。

瞳 私に……私に銭湯を継がせて下さい。

政夫 ダメ。（即答）

瞳 どうして！

政夫 瞳ちゃん、パパはねお前のことを思っついてるんだよ？（おちよくつた感じで）

瞳 は？ あれ、これどうしよう……。 （盤面を見ながら）

政夫 お、どうした？早くも勝負が……。ほーう、やるじゃねーか。

瞳 あのさ、お母さんってどういう人だったの？

政夫 母さんはねえ、おっぱいが大きかったよ。（瞳の胸を見ながら）

瞳 は？ 何？ 何見てんのよ！

政夫 王手。お前はそれで十分だよ。

瞳 死ぬ。

政夫 ん？ あ、おかしいな……。これ、つんだヤツだわ……。

瞳 やったね。ぼけてんじやないの？

政夫 何だ、生意気な。

政夫、立ち上がるうとした瞬間心臓に痛みが走りその場でもがく。

瞳 大丈夫？

政夫 ううっ……。ああ！

瞳 ねえ、ちよつと、大丈夫？

政夫 はあはあ……。

瞳 救急車呼ぶよ。

政夫 ああ……。

暗転。

遠くから聞こえてくる救急車の音。

## 6 樹海

音楽。

明転。

しかし、舞台は薄暗い。

泉、極度に疲労した様子で這っている。

泉 はあ、はあ、はあ、はあ。こ、ここは……。あ、そうだ俺は、俺は絵を描かなくちやいけないんだ。こんな、所歩いてる場合じゃないんだよ。たくさん描いて、それで、芸大に合格して。それで、それで、足がぬるぬるする。それで？ 俺は……。俺はどこを指してるんだ？ 足がぬるぬるして歩けないじゃないか！ なんて深い森なんだ。ここは、どこだ？ 俺は……。

浜田・ピエール、息を切らしながらも笑顔で入ってくる。

泉の言葉は全く聞こえないようだ。

ピエール 浜田さんちよつと休みませんか。

泉 あ、お前ら……。おーい、ここにいるぞー。

浜田 こんなペースじゃ全然つかないぞ。

ピエール でも、この道本当にあってるんですか。

浜田 どうだろうなあ。

泉 え、おい。おい。

浜田・ピエール、はけてゆく。  
里見・川本、のんびり入ってくる。

川本 愛ってなんなんですかねえ。  
里見 個人の立場や利害にとらわれず、広く身のまわりのものすべての存在価値を認め、最大限に尊重して行きたいと願う、人間本来の暖かな心情のことですよ。

泉 おーい。

川本 へえ、誰の言葉ですか？

里見 金田一京助。

川本 辞書じゃないですか。

泉 おーい。

里見 辞書じゃダメなの？

川本 そりゃあそうですよ。そんな答えじゃ樹海で立ち往生ですよ。

里見 そっかー。辞書の言葉じゃ……ダメなのか……。

川本、はけてゆく。

里見 じゃあ、お先に。……泉君！

泉 へ？……誰？

里見、軽快にはけてゆく。

同時に幼い日の瞳を連れて政夫、疲れた様子で入ってくる。

泉 あ、おじさん！

政夫 響子、響子じゃないか！……ということは、おれは死んだのか？

瞳 この人、ママなの？

泉 え、ママ？ 違うよ、俺だよ、俺。(歪んだ笑顔で)

政夫 確か俺は病院に運ばれて……あ、分かったぞ！ これは死後の世界だろ。

泉 いやいや、おじさんが俺の夢に登場してるんでしょ？

政夫 お前が夢を？お前も死んだのか？若いのに、可哀想に。

泉 いやいやいや、んなわけないじゃないですか。これは、夢ですよ、夢。

政夫 じゃあ、俺の見るのはお前がお前の夢の中で見る俺が俺の夢の中で見

てるお前ってことか？

泉 え……。

瞳 お兄さんは誰？

泉 だから……あれ、誰？

政夫 まあ、そうか、夢か。夢は何でもありだな。あれ、あ、あ、君、ナメク

ジだろ？

泉 ナメクジ？(自分の手を見て)ナメクジ。わあああ。

政夫 なんだ、響子じゃなかったのか……。

瞳 ねえ、もう帰ろう？パパ、今日変だよ。

政夫 ごめんな、しばらくは帰れないんだ。

瞳 どうして？

政夫 瞳、パパはね、いま捜し物をしてるんだよ。

瞳 帰ろう。帰ろうよお。ねえ、パパー。

政夫 行くんだ。行くんだよ！

瞳 いやああああ。



政夫、瞳の手を引っ張って強引に連れてはけてゆく。

泉 あ、ああああ。(発狂)

音楽。

コンテンポラリーダンス。

暗転。

しばらくして明転。

川本、新聞を読んでいる。

川本 銭湯って、いいなあ。なんか落ち着くっていうか、力が抜けちゃうって言うか、全部どうでもよくなっちゃうんだよね。あ、癖になってるのかなあうーん、脚本かあ、脚本って、どうなんだろう、うーん。

ピエール、手に葦の茎をもち、腰にタオルを巻いて、裸で難しそうな顔をしながら入ってくる。

ピエール 人間は考える葦である。

川本 ええと、ボンソワール……だっけ。(無駄に完璧な発音)

ピエール ボンソワール。

川本 人間は考える足？ 足が考える？ じゃなくて、足で考えるの？

ピエール 足では考えられませんよ。

川本 あ、ええ、ですよ。

ピエール 私達は葦のように弱い。だから、考えなければいけないんです。

ピエール、難しそうな顔ではけてゆく。

川本 足って弱いのかあ？ ふうん……。里見さんに頼んじやったけど、自分で書いてみればよかったかなあ。いや、それは無理だよな、あたしバカだし、何にも思いつかないし。いや、だから、わざわざ銭湯に取材に来たんじゃない。銭湯、面白いよね……。

里見、暗い顔で入ってくる。

里見 あ……か、川本さん、こんばんは。

川本 こんばんは、里見さん。あのう、脚本はどうになりましたかねえ？

里見 えっ、ああ、ちよっと今、考え中です。……ほら、人間は考える葦って言うでしょ。

川本 足……ですか。(足踏みしながら)

里見 でも、どうしてテーマが純愛なの？

川本 愛……って何でしょうね？

里見 え？

川本・里見、はけてゆく。

音楽。

泉、絵を一枚めくる。

少し不満げな表情。

## 7 我流先生

泉・浜田・川本、座ってそれぞれくつろいでいる。  
川本はうたた寝をしている。

泉 昨日……昨日メチャメチャ怖い夢見たわ。

川本 どんなものでした？（目をこすりながら）

泉 俺の苦手なものが出てくるんだよ。

浜田 あーナメクジね。

泉 ええ、どうして分かるんすか？！ こわっ。

川本 なんですか、それ、巨大ナメクジとか？ 目玉と角が伸びるんですよ、

あれ、びよんって。

浜田 そりゃ、気持ち悪いなあ。そうなのか？

泉 うえっ、ややめてくださいよ。ま、まあ、巨大と言えば巨大か。

浜田 おっ、巨大ナメクジらしいぞ。

川本 え、あたりですか？ 嬉しいっ。あたし、冴えてますね、今日。やれば

できるんですよ。脚本だって書けるかも。それ、巨大ナメクジ、面白いです

ね。脚本に使えるかなあ。町が巨大ナメクジに襲われるんですか？

泉 もう、やめて。

川本 襲われない。……とすると？ 世界を救う！

泉 なわけないだろ。……俺がナメクジになる夢だよ。

川本 ええっ……きつしよ。

浜田 やばいな、それ。お前、相当疲れてるな。

泉 ちよっと、外の空気吸ってくる。

里見、何となくぼんやりした顔で入ってくる。

入れ違いに泉はふらふらとはけてゆく。

川本 あ、里見さん！ 文学世界の賞、一次通過したんですね。名前、最後の

ページに載ってましたよ！ おめでとうございます。

里見 え、まあ……。どうも……。

川本 やっぱり、里見さんてすごいんですね！

里見 うん。

川本 泉先輩から借りて、小説読んだんですよ。いい話でしたねえ、あれが純

愛ですよ。実は私、あの小説に救われた気がするんですよ。なんていうか、

迷いが吹っ切れたと言うか。

里見 二次選考……。

川本 二次選考？

里見 二次選考……落ちちゃった。

川本 え、あ、そうですか……。

浜田 気にすんなって。次があるんだし。きつと、今回はついてなかったんだ

よ。

川本 そうですね。二次の選考員には里見さんの小説は難し過ぎただけです

よ！

里見 小説なんてどうして書くんでしょうね。

川本 え？

里見 知らないでしょう、僕の投稿してる雑誌では数千の中から最終的には一  
つだけを選ばれるんです。選ばれなかった小説達は誰にも読まれずただ死ん  
でいくんですよ。死ぬために生まれてきたようなものを、どうして書くのか

分からなくなっちゃって。馬鹿らしくなっちゃって。そんな、しょうもないこと、どうしてやってんだろ……。どうして……。

川本 あのこと……。

里見 え。

川本 あの、私、脚本書けますかねえ。

里見 え？

泉、帰ってくる。

泉 たいまいまー。

浜田 あ、お帰りー、って家じゃないんだから。

泉 あはは。あ、そういや、今日は燕が低く飛んでたよ。

川本 へ？

浜田 あ、知らないの？ そう言う日には雨が降るんだよ。

川本 なんですか、それ、迷信？

浜田 いやいや、科学的根拠があるんだよ。

川本 へえ。

泉 あ、そうそう、風呂の絵どうだった。

浜田 あー あれねだいぶ立派だったよ。あれだけ描けたいしたもんだ。

泉 あ、そう？ もうすぐ完成なんだよ。

川本 ライトアップしたらどうですか？

泉 え、そりゃあ変だろ。

川本 そうですかねえ。

泉 でもさ、なんかこう画竜点睛の一手に欠けると思わない？

川本 我流先生……我流なんですか？

浜田 ええ？！ そうなのか？

泉 そりゃあまあ、オリジナリティは大事ですけど……。

里見 我流か……。我流、我流。

泉 いや、だから画竜点睛ね。もうちよつとつてこと。

里見 我流が大事なのか？

浜田 は？

里見 そうか、我流か。我流に価値があるのか……。純愛……。我流……。

里見、ぶつぶつ言いながらはけてゆく。

浜田 里見……大丈夫か。

川本 さあ……。

暗転。

音楽。

途中から入る雨の音が音楽をかき消す。

## 8 あげぼの

明転。

里見・泉・瞳・政夫・浜田・ピエール・川本、政夫は中心に俯いて座

っている。

里見 あのこと……。

政夫 はあ……。

ピエール 大丈夫ですか？

政夫 大丈夫じゃねえよ。

ピエール そうですか。

政夫 そうですかじゃねえよ。

瞳 お父さん、みんなが心配して来てくれたんだから、いい子にして。

浜田 いやいや、ホントに心配しましたよ。

里見 たいしたことなくて良かったですよ。

政夫 たいしたことあったよ。

瞳 お父さん。……かなりひねくれちゃってんのよ。(小声でみんなに)

川本 うーん。でも、どうして救急車なんて呼んだんですか。将棋さしてたんでしょ。

政夫 ……大きなお世話だ。

川本 大きなお世話、ほう？

政夫 ああもう、うるせえええ。

川本 うるせえ、ほう？

浜田 やめなさいって……。

川本 あ、わかった、将棋で負けたとか？

政夫 うっ……。

浜田 大丈夫ですか？！

川本 心臓の発作と見せかけて、心だったりして。

政夫 ああ？

泉 ああ、すみません。(間に割り込んで)

政夫 はあ。もう、パパは引退することにしたから。

瞳 え？ てことは……。

政夫 どうせ、人生に正解なんてない。やりたいことをやりなさい。

瞳 お父さん……。

政夫 ただ、やるからには頑張れよ。

瞳 うん……。

政夫 はあーあ……。(ため息)

里見 やりたいことをやる……か。

浜田 ーん、雨……止んだねえ。

川本 ああ、ほんと……。

泉 あれ、富士山かな？

浜田 え、そうかなあ？

泉、窓を開ける。

瞳・浜田・川本、窓の外を見る。

泉 あ！(あっけにとられた表情)

瞳 ん？どうしたの？

泉 あれが、あれが富士か……。

瞬間、泉以外の人物がストップする。

泉、大きな筆でバックの絵の山並みをなぞると富士山の絵の稜線が光りだす。

描き終わった泉は力強く振り返る。  
筆を手に強く握りしめている。

里見、立ち上がって、ふと、窓の外を見る。  
音楽。

ゆっくりと暗転。

その中で、逆光に照らされた富士山と人物のシルエットだけが残る。  
すべての光が消える。

—幕—

【引用文献】

金田一京助編『明解国語辞典』三省堂  
パスカル『パンセ』岩波文庫

初演 神奈川県 桜美林大学・プルヌスホール 二〇一七年三月二十八日